

## 子どもに及ぼす教師のひとことの影響 (2)

善 岡 宏\*

### Effects of Teachers' Words and Deeds on Pupils (2)

Hiroshi YOSHIOKA\*

#### はじめに

清水 (1986) は著書の中で次のように述べる。『私たち教師は、教師としての自分の行動が学級の子どもたちにかかなりのマイナスの影響を及ぼしていることがある、ということを知っているのだろうか。最近までの筆者は、このようなことを多少は知っていたが、それほど強く意識したりはせず、専ら自分の研究や自分自身の生き方に夢中になっていたのである。ところが (中略) 私の行動もマイナスの影響を及ぼしていたことがあったのではないかと思ひ当たる節があり、りつ然としたことがあったのである。』

この一文は、自身を省みるとき、大きな心の動揺を与えるものであった。同時に環境要因としての教師について考えさせる重要な機縁にもなった。

善岡 (1994) は清水が用いたものと同様の内容・形式で大学生を対象に調査を行い、教師の言葉、行動が子どもに影響する様を追試した。子どもにとって教師の「人柄・優しさ・温かさ」、「指導態度」、「激励」、「理解」はプラスの経験として思い出に残るものであり、心の支えともなり、将来の進路・生き方にも影響するものであることを明らかにした。他方、「体罰やきつい叱りかた」、「誤解による叱責」、「理解できない叱りかた」、「不用意な発言」、「教師らしくない態度や行動」、「弱点の指摘、皮肉、悪口を言う」等は、マイナスの影響を及ぼすものとして子どもの心の奥深く留められるものであることも示した (第2回調査のデータに基づく)。今回は第1回と第3回の調査結果について報告する。

#### 目 的

教師の言葉、振る舞いが児童・生徒に及ぼす影響を、学校の種類、教師の特性、場面、影響の持続、の観点から検討することを目的とする。

#### 方 法

##### 調査時期と対象

第1回: 1987年6月と12月。長崎市内の、私立4年制大学の学生及び私立女子短期大学の学生計181名 (男子45, 女子136)

---

\*教育心理学教室

第2回：1990年1月。長崎市内の国立4年制大学の学生計175名（男子67，女子105，性別無記入3）

第3回：1995年1月。長崎市内の国立4年制大学の学生計251名（男子76，女子171，性別無記入4）

### 調査方法

教育心理学等の授業に出席した学生会員に用紙を配布し，集団で実施した。特別な教示は与えなかった。回答終了後，その時間内に回収した。

### 調査内容

清水（1986）が用いた質問内容を基に，前文を変えて質問紙を作成した。以下の教示により回答を求めた（調査用紙はB4判袋とじ印刷）。

#### （前 文）

教育・学習環境を考えるとときにいろいろな環境（要因）を挙げることができます。そのうち，教師自身が子どもにとって大きな環境であるという観点から，大学生の思い出を基に「環境としての教師」について考えてみたいと思います。さしつかえの無い範囲内で真実をお聞かせ下さい。

#### （調査内容）

あなたの幼稚園時代から高校生の時代までにおける先生のことを思い出して下さい。先生についての思い出はいろいろあると思いますが，それらの中で，「あのときのあの先生のあの一言（あるいは態度や行動や振る舞い）は，当時の私に非常なショックを与えた」と思われることがありますか？ もしあれば，それを①-②の順に書いて下さい。

①ショック：とてもうれしかった，とても感激した，とても有難かった，先生がとても好きになった，などのようにあなたにとってプラスの影響を及ぼした先生の一言（あるいは態度，行動，振る舞い）について

1. それはいつ頃でしたか？ ○で囲んで下さい。

（幼稚園 小学校1・2年 小学校3・4年 小学校5・6年 中学校 高等学校）

2. そのときの先生について，それぞれ○で囲んで下さい。

（男の先生／女の先生）

（若い先生／20・30代 中年の先生／40・50代 年取った先生／60代）

（受け持ちの先生 校（園）長先生 生徒指導の先生 同学年の先生 その他の先生）

3. それはどんなときでしたか？ ○で囲んで下さい。

（授業中 休み時間 クラブや部活中 放課後 学校外 その他 [具体的に： ]）

4. そのときの状態・状況を具体的に詳しく、次の余白に書いて下さい。（それはどんな言葉、どんな行動・振る舞いでしたか。また、あなたのそのときの様子なども書いて下さい。）
5. そのとき、あなたはどう感じましたか？（うれしかったとか、感動したとか、先生を好きになったとか、先生を尊敬するようになった、など）あなたのそのときの気持ちを具体的に、次の余白に書いて下さい。
6. そのときの気持ちは、どのくらい続きましたか？ ○で囲んで下さい。  
（2・3日 1週間ぐらい 1月ぐらい 半年ぐらい 現在まで）
7. いま、思い出してみて、そのときの先生のことをどう思いますか？ また、その後のあなたの人格形成に、どんな影響を及ぼしたと思いますか？ 次の余白に書いて下さい。

②ショック：とても悲しかった、とてもつらかった、先生がとても嫌いになった、などのようにあなたにとってマイナスの影響を及ぼした先生の一言（あるいは態度、行動、振る舞い）について

1～4及び6～7は①と同一で、5については（ ）内が以下のように異なる。

・・・（悲しかったとか、悔しかったとか、先生を嫌いになったとか、先生を軽蔑するようになった、など）・・・

なお、性別を○で囲むように求めたが、氏名は書かないように特に注意した。

### 結果と考察

第1回と第3回の結果の内、上述の調査内容の1～3及び6について分析した。第2回の調査結果の内調査内容4については、すでに報告されている（善岡，1994）。

回収した回答をチェックし、全ての質問に対して全く記入がない場合や、1つの質問に対して複数の回答をしている場合は集計から除外した。しかし、回答の一部が欠落している（未記入・無記入）場合には、個人データとしては不完全であるが、明瞭に回答されている部分について集計対象とした。従って、質問ごとに回答者数が異なる。

第1回調査、第3回調査の資料について、プラスの影響・マイナスの影響別、男女別に整理した。なお、以下の記述では、第1回調査の男子、女子をそれぞれM1、F1とし、第3回調査の男子、女子をM3、F3と略記する。なお、プラスの影響、マイナスの影響別に何らかの記号化が必要であるかも知れないが、煩雑さを避けるために記号化はしなかった。

#### 《ショック①：プラスの影響》について

Table 1 にショックを経験した時期について回答者数の分布を示した。幼稚園から高等

学校までの6項目であるが、青年期(中・高)とそれ以前で比較するために2分し統計的検定を行った。その結果M1, F1, F3, においては有意ではなかったが, M3において有意差が見出された( $\chi^2=3.88$ ,  $df=1$ ,  $P<.05$ )。男女とも、学年が進む(加齢)とともに頻度が増えているが、女子においては漸進的である。あるいは、女子においては比較的早い段階から教師からの影響を受けているといえる。女子にあっては遠い昔の、よき教師との思い出を持つことができることを示しているともいえる。

Table 1 プラスの経験をした学校種 (%)

項目	幼稚園		小学校1・2年		小学校3・4年		小学校5・6年		中学校		高等学校	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	0.0	2.6	0.0	6.1	19.0	12.3	21.4	21.1	28.6	25.4	31.0	32.5
第3回	1.5	2.8	4.5	8.5	15.2	16.2	16.7	20.4	31.8	31.0	30.3	21.1

Table 2 は相手の教師が男性であるか女性であるかによって分類したものである。M1, M3, F1, F3 において、男性教師が有意に多かった(それぞれ、 $\chi^2=12.10$ ,  $P<.01$ ;  $\chi^2=22.56$ ,  $P<.01$ ;  $\chi^2=6.57$ ,  $P<.05$ ;  $\chi^2=5.96$ ,  $P<.05$ ; いずれも  $df=1$ )。この結果からだけでは、出会う教師の数が男性が多いことを示しているのか、男性教師の影響力の強さを反映しているのかは即断できない。

Table 3 は相手の教師の年齢により分類したものである。ベテランの教師の方が人間的成熟とあいまってプラスの影響を与えるものと推測されるが、若い教師との間に有意差は見出されなかった。

Table 2 プラスの影響を及ぼした先生—1 (%)

項目	男の先生		女の先生	
	男子	女子	男子	女子
第1回	77.5	62.2	22.5	37.8
第3回	79.7	60.3	20.3	39.7

Table 3 プラスの影響を及ぼした先生—2 (%)

項目	若い先生		中年の先生		年配の先生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	60.0	43.4	32.5	56.6	7.5	0.0
第3回	53.8	50.7	43.1	42.1	3.1	7.1

Table 4 プラスの影響を及ぼした先生—3 (%)

項目	受け持ちの先生		校(園)長先生		生徒指導の先生		同学年の先生		その他の先生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	77.5	75.7	0.0	0.0	0.0	1.0	5.0	15.5	17.5	7.8
第3回	71.4	75.4	1.8	2.2	0.0	0.0	12.5	9.4	14.3	13.0

Table 4 は相手の教師がどのような立場にあるかによって分類したものである。M 1, M 3, F 1, F 3 において、「受け持ちの先生」が最も多く、他のすべてを合わせた数との比較においても有意に多かった（それぞれ、 $\chi^2=12.10, P<.01$ ;  $\chi^2=27.27, P<.01$ ;  $\chi^2=35.51, P<.01$ いずれも  $df=1$ ）。小学校においては学級担任としてはほぼ全日児童と共にいるので、影響を与える機会も多いと考えられる。中・高では、教科担任制で、「受け持ちの先生」との接触時間は小学校ほどではない。にもかかわらず、やはり「受け持ちの先生」が何かにつけ影響力を持っている。教師は学級をホームとみなし、他の生徒よりも思い入れが強いのであろうか。生徒も担任教師を我等が先生、こちら側の人とみなしており、そのため好意を持って教師の言動を受け入れているのであろうか。

Table 5 はその出来事に出会った場所、場面によって分類したものである。「授業中」、「休み時間」、「クラブや部活中」はいわばオフィシャルな場面である。「放課後」、「学校外」はプライベートな場面である。「その他」は回答によると「卒業式の時」や「進路指導」の時、「家に電話がかかってくる」等であった。オフィシャル、プライベートのいずれをも含んでいる。ここでは、前3項目と後3項目に2分し統計的検定を行った。その結果、M 1 および F 1, F 3 では有意ではなかったが、M 3 において有意差が見出された（ $\chi^2=6.78, P<.01, df=1$ ）。つまり、第3回調査において男子は有意に多くオフィシャル場面でその出来事に出会ったわけである。特に、「授業中」、「クラブや部活中」が多い。

Table 5 プラスの経験をした場面 (%)

項目	授業中		休み時間		クラブ・部活中		放課後		学校外		その他	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	41.7	45.7	0.0	0.0	8.3	7.4	27.8	27.7	0.0	4.3	22.2	14.9
第3回	35.4	26.0	6.2	15.3	24.6	8.4	15.4	19.1	3.1	5.3	15.4	26.0

《ショック②：マイナスの影響》 について

Table 6 にショックを経験した時期について回答者数の分布を示した。幼稚園から高等学校までの6項目であるが、青年期（中・高）とそれ以前で比較するために2分し統計的検定を行った。その結果、（それぞれ、 $\chi^2=6.90, P<.01$ ;  $\chi^2=7.76, P<.01$ ;  $\chi^2=7.41, P<.01$ , いずれも  $df=1$ ）。男女とも、学年が進む（加齢）とともに頻度が増えている。女子においては中・高の青年期にマイナスの経験が急増していることが特徴的である。多感な、情緒的に不安定なこの時期にマイナス経験を持ちやすいことを示している。

Table 6 マイナスの経験をした学校種 (%)

項目	幼稚園		小学校1・2年		小学校3・4年		小学校5・6年		中学校		高等学校	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	2.6	1.7	7.7	10.3	5.1	12.9	23.1	12.1	23.1	31.9	38.5	31.0
第3回	1.7	0.0	3.4	4.5	8.6	12.9	19.0	16.3	29.3	32.7	37.9	28.6

Table 7 は相手の教師が男性であるか女性であるかによって分類したものである。M 1, M 3, F 3 において、男性教師が有意に多かった（それぞれ、 $\chi^2=6.90, <P<.01$ ;  $\chi^2=7.41, P<.01$ , いずれも  $df=1$ ）。

Table 7 マイナスの影響を及ぼした先生—1 (%)

項目	男の先生		女の先生	
	男子	女子	男子	女子
第1回	62.9	59.1	37.1	40.9
第3回	73.6	62.6	26.4	37.4

Table 8 マイナスの影響を及ぼした先生—2 (%)

項目	若い先生		中年の先生		年配の先生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	32.5	39.0	67.5	59.3	0.0	1.7
第3回	52.7	41.5	47.3	51.7	0.0	6.8

Table 8 は相手の教師の年齢により分類したものである。ベテラン教師のほうが人間的成熟をあいまってプラスの影響を与えるものと推測されるがM 1, F 1, F 3 において若い教師との間に有意差が見出された（それぞれ、 $\chi^2=4.90, P<.05$ ;  $\chi^2=5.73, <P<.01$ ;  $\chi^2=4.25, P<.05$ , いずれも  $df=1$ ）。経験もいまだしと思われる若い教師よりもベテランと呼ばれる教師においてマイナスの影響を及ぼしやすいといえる。特に女子において明瞭である。

Table 9 マイナスの影響を及ぼした先生—3 (%)

項目	受け持ちの先生		校(園)長先生		生徒指導の先生		同学年の先生		その他の先生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	74.3	64.8	0.0	0.9	0.0	3.7	20.1	14.8	5.7	15.7
第3回	46.2	66.2	0.0	2.9	7.7	3.6	30.8	16.5	15.4	10.8

Table 9 は相手の教師がどのような立場にあるかによって分類したものである。M 1, F 1, F 3 において「受け持ちの先生」が最も多く、他の全てをあわせた数との比較においても有意に多かった（それぞれ、 $\chi^2=8.26, P<.01$ ;  $\chi^2=9.48, <P<.01$ ;  $\chi^2=14.57, P<.01$ , いずれも  $df=1$ ）。担任として生徒と接触する機会は小学校ほどではないと思われる中・高でやはり「受け持ちの先生」が多く、良きにつけ、悪しきにつけ影響力を持っている。教師は学級をホームとみなし、他の生徒よりも思い入れが強く、生徒の足らざるところに目が行きやすいのだろうか。

Table 10 はその出来事に出会った場所、場面によって分類したものである。プラスの場合と同様に、前3項目と後3項目に2分し統計的検定を行った。その結果、いずれにも有意差は見られなかった。オフィシャル・プライベートを問わず、マイナスのその出来事に出会っていると見える。

Table10 マイナスの経験をした場面 (%)

項目	授業中		休み時間		クラブ・部活中		放課後		学校外		その他	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
第1回	55.3	53.1	7.9	11.5	2.6	5.3	13.2	12.4	0.0	7.1	21.1	10.6
第3回	39.3	45.6	17.9	14.0	8.9	5.1	17.9	16.2	1.8	4.4	14.3	14.7

#### 学校種について

プラス及びマイナス経験（記憶されているもの）は、男女ともに学年進行と平行して増加している。女子においては青年期にプラス経験、マイナス経験が急増する傾向がある。教師のひとことが、女子青年に及ぼす影響の強さを示唆している。

#### 教師の性について

プラス経験、マイナス経験のいずれにおいても男性教師が多い。単に職場における男性教師の比率を反映しているのかもしれない。

#### 教師の年齢について

プラスの影響については、若い教師（20・30代）と40代以上の教師との間には違いは見られない。マイナスの影響については、若い教師よりも中年以降のいわゆるベテランの教師において多い。特に女子においては第1回、第3回調査ともに同様の結果であった。

鈞（1995）は、小学6年生・中学3年生と小・中学校の教師を対象として、子どもと教師の意識の違いや認知のずれについて調査を行っている。「子どもの気持ちをよく理解している」と回答した教師についての分析結果は、教職経験が増すほど肯定的な自己評価傾向が強まることを示している。さらに、子どものによる客観評価と教職年数別にみた教師の自己評価を比較すると、15年以内の教師の自己評価は子どもの評価よりも過小に評価し、逆に16年以上の教師では、子どもの評価よりも過大に評価することが明らかになった。いわゆるベテラン教師の自己評価と子どもの評価との間にずれが生じているのである。

経験の広がりとともにますます自己に磨きがかかるのか、悪しき慣れ、惰性の中で自己を省みることが忘れてしまうのか。『人間としての謙虚さを持ち続ける』（鈞、1995）事が教師に求められている。

#### 教師の立場について

受け持ちの教師は、良きにつけ、悪しきにつけ子どもに影響を及ぼしている。教科担任制である中・高においても同様である。

校長先生が非常に少ない。入学式、卒業式、終業式、運動会（体育祭）、学芸会（文化祭）等の公式行事における訓話が子どもに感銘を与える事例もある。折にふれてそれを思い出すこともある。また、校長は教師への指導を通して間接的に子どもに影響する面もあるであろう。しかし、校長は子どもからできるだけ離れて欲しくないと思う。

これまで、プラス、マイナスの影響について述べてきたが、それらはどの程度持続するものであろうか。感動・喜びは永く、悲哀・苦痛は短く、と望むのが人の偽らざるところであろう。では、データは何を示しているであろうか。

第1回のプラスの影響については、「2・3日」から「半年ぐらい」までを合わせたもの（男子：29.7%，女子：20.4%）と「現在まで」（男子：70.3%，女子：79.6%）を検定したところ、男女ともに有意であった（それぞれ、 $\chi^2=6.08, P<.05$ ;  $\chi^2=37.93, <P.01$ , いずれも $df=1$ ）。

第3回のプラスの影響についても同様の比較を行なった。「2・3日」から「半年ぐらい」までを合わせたもの（男子：26.2%，女子：13.3%）と「現在まで」（男子：73.8%，女子：86.7%）を検定したところ、男女ともに有意であった（それぞれ、 $\chi^2=14.78, P<.01$ ;  $\chi^2=72.60, P<.01$ , いずれも $df=1$ ）。

一方、第1回のマイナスの影響については、「2・3日」から「半年ぐらい」までを合わせたもの（男子：39.5%，女子：48.7%）を検定したところ、男女ともに有意ではなかった（それぞれ、 $\chi^2=1.68, P>.05$ ;  $\chi^2=0.08, P>.05$ , いずれも $df=1$ ）。

第3回のマイナスの影響についても同様の比較を行なった。「2・3日」から「半年ぐらい」までを合わせたもの（男子：39.6%，女子：48.6%）を検定したところ、男女ともに有意ではなかった（それぞれ、 $\chi^2=2.28, P>.05$ ;  $\chi^2=0.12, P>.05$ , いずれも $df=1$ ）。

以上より、男女ともプラスの経験を現在まで持続している者が多く、一方、マイナスの経験を過去の出来事とする者よりも、現在なお悲しさ、悔しさ、惨めさを感じ続ける者の方が多いとはいえない。

励ましや、感動、喜びを与えてくれた経験はいつまでも思い起こされやすく、現在の自身の糧になるであろう。

「思い出したくない、書けなくてごめんなさい」という悲痛な事例もあった。簡単には忘れられそうにないことをうかがわせる。『未だのこる怨念』（おかだ, 1984）とまではいかないまでも、忘れることの難しい事例もある。他方、嫌なことは早く忘れようとし、また、マイナスの不快な出来事をプラスに変えている事例もある。

「学校という世界にあって、子どもにとっての最大の教育環境は、まぎれもなく教師自身である」（鈞, 1995）

## 引用文献

- おかだれいこ 1984 未だのこる怨念 児童心理 38,3 137-137.  
清水利信 1986 教師のひとこと 田研出版 東京.  
鈞 治雄 1995 教育環境としての教師 調査結果にみる教師と子どもの認知のずれ  
善岡 宏 1994 子どもに及ぼす教師のひとことの影響 (1) 長崎大学教育学部教育  
科学研究報告 第47号 63-70.